

▲高橋睦郎さん講演会

「五足の靴」と与謝野寛

10月21日(日)

与謝野寛(鉄幹)らが九州を旅して書いた紀行文「五足の靴」発表されて百年になるのを記念して、本市出身の詩人で、与謝野寛の詩業に詳しい高橋睦郎さんをお招きして講演会を開催しました。高橋さんと交流の深い詩人・伊藤比呂美さんも熊本から飛び入り参加。「五足の靴」や寛が文学史に与えた意義について、寛・晶子の詩や短歌の朗読を交えながらお話ししていただきました。なお、本講演会は、熊本近代文学館のご協力により実現しました。

高橋 「五足の靴」は、与謝野寛が、主宰していた雑誌「明星」同人の北原白秋、太田正雄(木下杢太郎)、平野萬里、吉井勇を連れて、「五人づれ」として書いたものです。九州を旅行して、その旅行記が当時の「東京二六新聞」に連載されます。これはわが国近代

文学史上の一大事件ということになっていきます。なぜかというところ、これだけ一緒になつて一ヶ月の旅をしたにも関わらず、寛に率いられた四人がその年のうちに「明星」を脱退します。その直後に、白秋は「邪宗門」「思ひ出」という代表的な詩集を出し、李太郎や勇も詩人として知られるようになり、背かれた与謝野寛という人も、背かれてどん底の気分を味わうんですが、「相聞」という素晴らしい歌集を出すんです。それから、このあとにわが国初の芸術運動と言える「パンの会」が始まります。そういうわけで、「五足の靴」があつて、その決裂により日本の詩歌文学が爆発するわけです。

伊藤 パンの会の影響について詳しく教えて下さい。
高橋 白秋の「思ひ出」はそこから生まれたと僕は思っています。こ



高橋睦郎さんと伊藤比呂美さん

の旅で長崎や天草を訪れ、キリシタン文化に触れたことから、白秋や李太郎の南蛮文学が開花します。そして李太郎が東京で白秋のために開いたのがパンの会だと僕は見ています。なぜかというところ、その会場が全部大川(隅田川)のほとりなんです。つまりそこで柳川がもう一遍復活するわけですね。白秋は自分の柳川を思い出して、総括して、ああいうものができるといいます。ところで寛が背かれた理由ですが、彼はそれなりに主宰者風吹かせるようなこともあつたんじゃないかと。明治の青年たちは傲岸不遜ですから、耐えられないという思いがあつた。それから「五足の靴」の旅で大隈・薩摩に行かなかつたのは、子供の頃寛はそこで過ごしてますから、行って色々我慢されたくないというところがあつた

かもしれません。結局彼は背かれるんですが、背かれる事は指導者の大事な要素だと思ふんです。そうじゃないと後に来る人は皆先生より下のまま終わるでしょう。背かれてこそ初めて先生を越える事ができ、あるいは違うところに行く事ができる。だから背いた人達が大きくなるのであれば指導者として非常に優れている。かつ、寛は背かれた中からいい作品を生み、大きな存在になつていく。落魄の思

いの中から成長するんです。それまでのただの勢いのいいものに苦味が加わって深みを増すんですね。結局、この旅行自体が必然的な運動であつたし、その決裂も必然的なものであつたという気がしますね。

寛はこの時の事を歌にしています。
わが雛はみな鳥となり飛び去らんぬうつろの籠のさびしきかな
才高く歌もて我をおどろかす惜しき三三子あやまちをせよ
出て行つた二、三の才能のあ

る若い人達よ、君達はこれから色々挫折をなさないと。過ちをしないと大きくなれないよという励ましでもあるんですね。この人の全集や詩集は世に出ていなくて、少なくとも彼の歌集は出さなくては行けないと思います。
それから晶子の奔放な性質を見出して育てたのは寛だと思ふんですね。晶子は追悼の歌では手放して寛のことをほめていきます。やはり魅力ある人だったんでしょう。

伊藤 晶子は寛の影響を受けたけれども、寛も晶子の影響で書くものが変わったのでは。
高橋 初期の寛の作品は、「虎剣流」「ますらをぶり」と呼ばれる作風で、ただただ勇ましい。それが非常に細やかになって、苦味を帯びてくる。晶子の影響もあるし、環境もありますね。自分が発見した人を育てて、育てる中から自分が逆に影響を受けて大きくなるというのはほんとに才能ですね。

参加者約二〇〇人